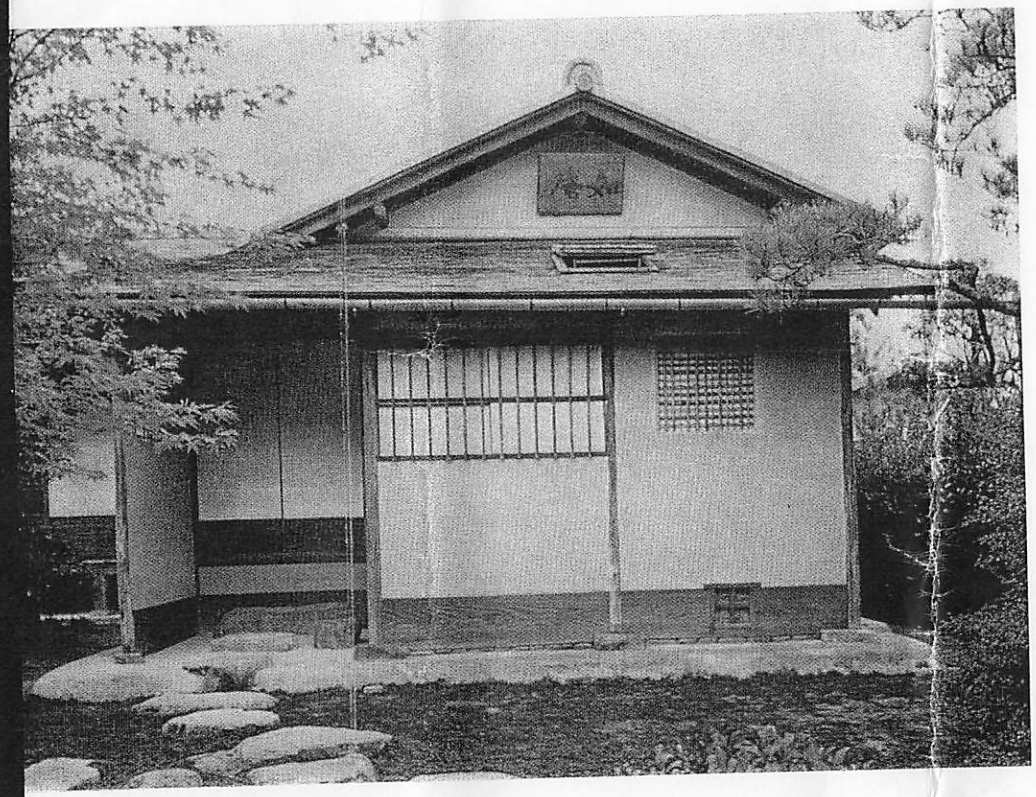
茶人織田有楽斎の生涯

坂口筑母著



(株)文献出版

茶人織田有楽斎の生涯

坂口筑母著

3321—1093—7453

の妙味あるが此茶入の特徴にして、佗茶人の大に賞翫すべき者ならん。

有楽と茶屋四郎次郎

慶長十七年の十二月に、有楽は通算七回の茶会を催している。その一例、「十二月九日昼。客、長谷川左兵衛・茶屋四郎次郎・小西関富。一懸物・紀国大灯。一花入・角頭巾。一茶入・草部や。一茶碗・吉蔵焼」。

長谷川左兵衛については本稿「岡本大八事件の余波」を参照されたい。

茶屋四郎次郎は三代目四郎次郎清次であって、長谷川左兵衛藤広とはことに親しい。というのは、慶長十二年四郎次郎清次は長崎に下り、左兵衛と共に貿易に従事するや、長崎商物糸巻物以下売買の代官と異名をとり大活躍したからである。そして同十七年には朱印船貿易に従事、のちの大阪陣では事前に家康の命を受けてオランダ製の火器および火薬の輸入を行う一方、金銀改役の後藤庄三郎の介添えで和睦交渉の内使をつとめる。じつはこの時、両陣営の中にあって、和平交渉の推進に奔走するのが有楽であった。（後項参照）また、慶長十七年四月十三日の有楽亭茶会に招かれた茶屋又四郎は、二代目四郎次郎清忠の弟であり、この時にも長谷川左兵衛が同席していた。又四郎もまた関ヶ原役の際、軍需物資の調達に活躍した。

十二月中七回開いた有楽亭会に招かれた客を、参考までに挙げると二十二人、百万辺、施承院・天王寺・長谷川左兵衛・茶屋四郎次郎・小西関富・新門主・中性院奈良・真野蔵人・前田権蔵・小出大和守・建部内近・翠竹・塩屋彦左衛門・井筒屋道宇・鳥屋与五郎・竹田永翁・生駒宮内・真木島庄太・織田丹後守・山岡一閑・宗瓦らである。織田丹後守は有楽の四男、名は長政、信益といい、通称は左衛門佐、号卜斎、茶を能くする。

少庵は有楽の世話に

慶長十八年（一六一三）、有楽六十七歳。

『居諸集』慶長十八年正月の条にいう。

十二日。早天裁書遣二有楽老之宅少庵一。々々返事曰。今朝於二有楽宅一有二茶湯客一。数寄過時分可レ来云々。以レ故先到二竜雲院雲叔和尚一。呈二踏皮一足一。和尚留而見レ進レ羹勧レ酒。次到二片市正殿之宅一。以二杉原十帖・五明五本一為二資一。履一足遣二半右衛門一。次到二有楽老一。有楽対面。呈二杉原十帖・鹿扇一本一。次上二御城一。献二杉原十帖・板物一端一。此両種者鹿苑常住弁レ之。

秀頼公御対面。頂二戴御盃一。御服一重拝領而帰矣。帰二旅店一。喫二午炊一。而乗レ轎而出。至二淀在所一而寄宿。喫二晩炊一矣。

昕叔顕晴は年賀に有楽を訪問するため

「有楽の宅少庵」

に遣し、都合を問合せた。その返事に、

「今朝、有楽宅において茶湯の客あり、数寄過ぐる時分に来るべし」

とある。

千少庵が大阪に居し、有楽の世話になっていたことが判る。

当日の茶会は左の如し。

十二日朝

速水甲州(守之)　千少庵　津田道也

一懸物　大虚堂　中立の内にかゝる

一花入　青磁きぬた　白玉梅

一茶入　大茄子

一水指　芋頭

唐花碗　印ふた置

薄茶はかすがい茶わん

……（有楽亭茶湯日記）

少庵が有楽亭茶会に招かれるのは慶長十六年六月に遡り、「六月四日朝。客・千少庵・金屋道也・植原八蔵。一懸物・宗祇像。一花入・ひやうたん。一茶入・丹波焼かたつき。一茶碗・平高麗。一水指・ホウ月」「十日朝。客、誓願寺・千少庵・金屋道也。一懸物・普化。一花入・くわん。一茶入・丸壺。一茶碗・青磁のマブクラン。一水指・縄簾」とある。

少庵は利休の後妻宗恩の子で、道安(千)の義弟になる。幼名を吉兵衛、通称四郎左衛門といい、宗淳、少庵と号した。『茶人大系図』に、「号二少庵一初称二四郎左衛一宗易(利休)第二子也、母継室宗音(恩)尼以二兄道安有レ病宗淳続レ家、慶長十九年甲寅九月七日歿、葬二紫野聚光院一、牌名少庵宗淳居士」其母宗音左海宮尾道三女也、有二数奇才人一、父道三善二謡曲及茶事一又能レ書」とある。少庵の義兄、すなわち利休の嫡男が道安であり、同出典によれば「千道安初名紹安後改二道安一、或作二宗安一号二眠翁一、宗易(利休)没後以二前田利家推挙一道安少庵蒙二免許一蓋二父之事一也、天正十五年（一作慶長庚戌）七月朔日没、葬二大徳寺中聚光院一、牌名云二眠翁道徹居士一棲霞按道安先二利休一死、休翁(利休)没後蒙二免許一之悦未レ解、一云安(道安)嘗為二春屋国師俗弟子一宗易嫡男也」と。道安の死に異説あり、一説には慶長十五年とし、また千家の伝えるところでは慶長十二年二月二十七日という。また『茶譜』に、「茶会ノ極意ハ一子相伝トナル、宗易(利休)嫡男眠翁紹安(道安)蹇病ナル故ニ、少庵宗淳伝授ス」とあって、道安は幼少より蹇脚

であったがために、少庵が利休の茶家を継いだとする。

利休没後、少庵は会津の蒲生氏郷のもとに遁れたらしい。『茶事集覧』に「少庵養子なれども嫡子とす、利休切腹の後ち蒲生氏郷に預られ、会津に住す、氏郷は利休の門弟たるに依って、殊に懇篤なりき」と伝える。その後、少庵は前田利家に一時身を寄せるが、家康の斡旋もあって千家の再興を許され、新地五百石を与えられた。そして、有楽亭に招かれるは頃、大阪に居し、有楽の世話になっていたのである。

有楽と玉室和尚と沢庵和尚

少庵を招いた茶会の日、昼には沢庵・玉室を誘って茶を点てている。

十二日昼

沢庵和尚　玉室和尚　竹田城庵

一懸物　一休江口

一花入　つる一声

一茶入　京極なすび

甲茶碗

かねの水さし　印の蓋置

……（有楽亭茶湯日記）

沢庵和尚は宗彭をいう。堺南宗寺の十二世にして大徳寺百五十三世、名僧の誉れ高く、玉室和尚宗珀とは莫逆の友であった。一説には、有楽の師が玉室和尚であると伝える。

玉室和尚については『竜宝大徳寺世譜』より小伝を参考に掲げておく、「一百四十七　玉室、諱ハ宗珀、春屋園一百一ニ嗣ク（園ノ俗姓ナリ）自号瞳眠子、京ノ俗姓園部氏、慶長十二丁未二月十九日奉、勅入寺（時年三十六）本山ニ芳春大源ヲ創ス、元和六庚申十二月廿一日、後水尾帝、勅特直指心源禅師ト賜フ、寛永六己巳七月武州ニ下向ノ宗法ニ事アリテ同廿七日奥州赤館ニ配流ス、寛永九壬申七月十七日ニ赦免ス、寛永十一甲戌八月四日大猷院左大臣家ヲ拝ス、寛永十三丙子本寺ノ方丈ヲ一新ス、同十八辛巳五月十四日示寂、寿七十、偈曰、天関地軸当機踏翻喝随処称尊ト、芳春院ニ塔シ牌ヲ祖堂ニ安ス」。

有楽に限らず、茶湯宗匠にはそれぞれの師がいる。

『茶道正伝集』の「古今茶湯宗匠宗旨之事」によれば、

珠光ハ　一休和尚ノ弟子也

紹鷗ハ　大林和尚ノ弟子也

津美術館の矢崎格氏の知遇を得、有楽に関する資料の示教に預った。そして、波多野先生は「資料と文献はなるべく原文のほうがいい」と助言なされ、文献出版の栗田治美氏をご紹介くださった。ここに、伯楽の一顧を忝くして、本書の出版の道が開かれたのである。まさに、青天の霹靂であった。

栗田治美氏は資料・文献の正確無比なることを第一と心掛けられ、数多くの貴重な出版物を世に問うている。その出版信条に、私は、清清し平旦の気を痛感し、盲亀浮木の幸運に感謝した。本書に収めた資料・文献をほぼ原文に書き改めたのも、栗田氏の素志に賛同したからである。

ここに虔んで、お世話頂いた三井関係の方々および先学諸氏に心から深謝します。

坂口筑母生

茶人織田有楽斎の生涯

昭和五十七年一月十二日発行

著者　坂口筑母

発行者　栗田治美

発行所　株式会社　文献出版
東京都千代田区神田神保町二―三二
電話　東京（二六三）七九六八
振替口座　東京八―四三六四九

印刷所　株式会社　公和美術
製本所　株式会社　中西製本

乱丁・落丁本はお取替いたします。

3321―1093―7453 ©